

St. Luke's International University Repository

Health-Concept and Related Variables in First-year Nursing Students.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 香春, 知永, 横山, 美樹, 佐居, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/342

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



看護学生の入学当初の健康観とそれに関与する要因

小澤 道子¹⁾ 香春 知永²⁾
横山 美樹³⁾ 佐居 由美⁴⁾

要 旨

看護学の基本的構成概念の一つである「健康」という言葉は、日常の会話に中でよく用いられる言葉であり、また学問領域において専門的概念を問われることばでもある。

本調査は、看護学を専攻して入学した学生の健康観とそれに関与する要因を明らかにすることを目的とした。このことは、「自分の健康を自分で守る」こと、そして、「人の健康を守り高めていく」ことを大事にする看護教育の在り方に資することである。

対象は、s看護大学1997年度入学生84人であり、自覚的健康状態、注意している健康行動、生活の満足度、自己概念、属性、健康とは何ですか? の設問と自由記述を求めた健康観から構成された質問紙法を4月に実施した。自由記述された内容は、KJ法に準じてラベル化し、WHOの健康の定義の3側面と記述表現で分析した。

その結果、

- ① 対象者の自覚的健康状態は、非常に健康・まあ健康が95.1%、そして現在の生活に満足・まあ満足が9割であった。
- ② 健康観は、KJ法に準じてラベル化すると平均記述件数 2.8 ± 1.3 (1~7) で件数の幅に個人差があり、側面のとらえ方も身体と精神面の複合が7割で、残りは、身体面のみ単側面、身体・精神・社会面の3側面から幅があった。
- ③ ラベルの記述は、「快食」「気分がよい」など肯定的な表現が過半数をしめ、次いで「病気がない」「悩みがない」など否定的なことがないことを健康と表現した件数は24%、残りが混合21.8%であった。
- ④ 学生個々の記述全体内容を観念的・非現実的と実践的・現実的に分け検討すると、前者は、病気や障害の対極が健康であるとする疾病モデルの健康観が根底にあり、あるべき理想像の表現が多く、後者は、現実の生活行動が表現され、生活モデルの健康観に近かった。
- ⑤ 健康観の側面の幅が広く、生活と結びついた健康観をもつ群はもたない群に比べて、自己概念総得点が高く、生活に満足している者の割合が有意に多く、現在の自分の生き方や、生活に対する主観的な意識が健康観に関与すること

が示唆された。

以上、「自分で自分の健康を守る」看護学生を育てるには、多様な健康観に気づきその中で「私の健康観」の位置とその方向を新たに見いだして知ることや、自分の生活行動を通して動的な健康状態に気づくことの大事さが示唆された。

今後、主観的側面を重視した健康の質を問い続けていく意味の重要性と、教育(研究)においてどのような取り組みで実証化していくかの課題が残された。

キーワード

健康観 看護学生 入学当初

1) 聖路加看護大学教授(基礎看護学)

3) 聖路加看護大学講師(基礎看護学)

2) 聖路加看護大学助教授(基礎看護学)

4) 聖路加看護大学助手(基礎看護学)

I. はじめに

看護学の基本的構成概念の一つが「健康」であることは一般に認められている。従って、「健康」とは何か？の問いかけは、看護学にとっての中核の問いのひとつであり、その答えを追求していくことが看護学に携わる者に求められている課題であろう。

さて、この「健康」という言葉は、日常の会話の中でよく用いられる言葉であり、また学問領域において専門的概念を問われることばでもある。

本調査は、看護学を専攻して入学した学生の健康観とそれに関与する要因を明らかにすることを目的とした。このことは、「自分の健康を自分で守る」こと、そして、「人の健康を守り高めていく」ことを大事にする看護教育の在り方に資することである。

II. 対象と方法

対象は、s看護大学1997年度入学生84人である。入学生84人のうち、70人は、学部1年生であり、14人は、2年次生となる学士編入生である。方法は、質問紙法であり、1997年4月に調査の趣旨と成績評価や個人的問題に影響しないことを伝え教室内で実施した。回収数は、当日出席83人全員からであった。質問紙の内容は、尺度を使用した項目として現在の自覚的健康状態・生活の満足度・自己概念測定尺度と、注意している健康行動の有無、対象者の背景、そして、自由記述を求めた健康観で構成されている。データ分析は、統計パッケージHALBAUを用いた。また、自由記述された健康観の分析は、まず記述されたものをKJ法に準じてラベル化する手続きを

表1 対象者

人 数	1年生	70人
	学士編入生	13人
平均年齢	1年生	18.5±1.3歳 (18~28)
	学士編入生	23.8±1.8歳 (22~27)

表2 対象者の現在の生活 n=83

項 目	程 度	人数 (%)
自覚的健康状態	非常に健康	25 (30.1)
	まあ健康	54 (65.1)
	あまり健康でない	4 (4.8)
	健康でない	0
生活の満足	満足	31 (37.3)
	やや満足	43 (51.8)
	やや不満	9 (10.9)
	不満	0

とり、次いで、WHOの健康の定義の3側面と記述表現(肯定的・否定的、具体的・抽象的)から内容を分析した。

III. 結 果

1. 対象者の背景

対象者の平均年齢は、学部1年生が18.5±1.3歳(18~28)であり、学士編入生は23.8±1.8歳(22~27)であった(表1)。平均同胞数は、2.3人で、平均家族数4.5人、核家族83%であり、自宅からの通学は73.5%であった。

2. 現在の健康状態

① 自覚的健康状態

対象者が自覚する健康状態は、「非常に健康」25人(30.1%)、「まあ健康」54人(65.1%)、「あまり健康でない」4人(4.8%)であり、「健康でない」と答えた者はいなかった(表2)。

② 健康について注意していること

最近、自分の健康に注意している者は70人(84.3%)であり、注意していない者は13人(15.7%)であった。自由記述された注意している内容は、食べること：栄養のバランス・野菜を食べるなど、寝ること：早寝・睡眠など、運動：できるだけ運動をする・階段は昇降する・歩くなど、そしてうがい・手洗いなどと日常生活に関することであった。記述件数は、8割が1件のみであり、多い人で3件(1人)であった。

③ 健康についての心配の有無

健康について心配や不安のある人は、44人(53.0%)と過半数を占め、その内容は、月経に関すること：月経痛・月経不順などが6件、腰痛4件、大学生活に体力がついていけるか4件、便秘3件などさまざまであった。

なお、月経の記録をつけている者は33人(39.8%)、つけていない44人(53%)、残り8人は無記入であった。

④ 生活の満足

生活の満足度を四段階で問うと、満足31人(37.3%)、やや満足43人(51.8%)、やや不満9人(10.9%)で不満の者はいなかった。

以上、健康上の背景について、学生の背景別(学士編入生・学部1年生)に検討したが類似の結果であった。

3. 自己概念

自己概念は、個人が自分をどのように認識している

表3 自己概念測定尺度の領域

自己価値	ユーモア	運動能力
社会性	容姿	道徳性
友人関係	知性	学業能力
母親との関係	父親との関係	異性関係
創造性	親しい関係	援助
養育	家庭管理	仕事・家事

かを表すもので、今回は上田¹⁾がHarter, S²⁾(1986)に基づき作成した日本の青年用のSJS-PSAに、成人用の項目と領域項目を追加した32項目を用いた(表3)。得点は各項目について「まったくあてはまる」4点から「まったくあてはまらない」1点までの4段階の中から1つを選択するもので、総合得点を算出し得点の高い方が自己をより肯定的にとらえていることになる。総合得点は、全項目に回答のある77名で算出され、得点範囲59点から110点、平均得点が、88.1±9.7であった。学生の背景別平均総合得点は、学士編入生:90.5±8.5、学部1年生:87.7±9.9と近似していた。

4. 記述ラベルからみた健康観

① 記述ラベルの平均件数

「健康とは何ですか」の問いに自由記述を求め、記述内容を意味のとれる最小単位の単語あるいはフレーズに分けそれをラベル化し量的に検討した。ラベル総数229件で、一人当たり平均記述件数は、2.8±1.3件であり、件数の幅は1件から7件と個人差があった。

② 記述内容の側面

ラベルごとの記述内容は、WHOの健康の大憲章(1946)にある「健康の定義」の3つの側面すなわち、身体的側面(以下Pとする)・精神的側面(以下Mとする)・社会的側面(以下Sとする)とそれ以外に分類した(表4)。なお分類にあたっては、研究者間で一致するか否かを検討する手続きをとった。記述側面は、P面のみ記述とP+M面が複合された記述が同数の25.8%と一番多く、次いで、M面20.1%、生活面11.7%、S(社会)面2.1%、P+M+S面1.7%、S+M面0.4%、その他12.2%であった。身体面と分類した記述内容は「病氣(ケガ)がない」・「快食」・「身体に異常や不自由がない」・「快

表4 健康に対する記述内容

n=83

側面	内容	件	%
身体面	病氣(ケガ)がない(11) 快食(9) 身体に異常・不自由がない(7) 快眠(7) よく寝る(6) 体の調子がよい(5) やりたいことができる体(3) 疲労のない からだ・ふつうの体力(各2) 運動活発・体が正常・身の回りのことができるからだ・快便など(各1)	59	25.8
精神面	悩み・不安がない(8) 心が健やか(7) 心配や悩みがあっても前向きな心(7) 気分良い状態(4) 何かやろうと努力する心(3) 心穏やか・充実・楽しい・明るい・頑張るぞ・心安定(各2) ゆとり・心が正常・リラックス・精神的に疾患がないなど(各1)	46	20.1
社会面	周囲の人と助け合う(3) 友(男)仲良く(2)	5	2.2
身体面 +精神面	心や体に病氣(異常)がない(14) 心身ともに安定(9) 心身ともに健やか(7) 心身ともに満足(4) 病氣あっても心が安定(4) 心身にゆとり・良好・快適・向上・はつらつ(各2) 心身がリラックス・意志どおりに働くなど(各1)	59	25.8
精神面 +社会面	悩みを解決するよう努力し周りと支えあう(1)	1	0.4
身体面 +精神面 +社会面	身体と精神と社会的にある程度満足のいく状態・心も体も健やかで、日々の経済生活、家族友人との交流が支障なくおこなわれる・精神的肉体的環境などにエネルギー注いでいくことのできる状態・精神面肉体面環境など外部からの圧迫によって自分のスタイルを崩されることなく暮らす(各1)	4	1.7
生活	生活に支障がない(10) 気持ちよい生活(4) 充足した生活(4) 自分らしい生活(2) 生活習慣に満足(2) 生活の基本・生活の条件など(各1)	27	11.8
その他	生きることが楽しい(5) 人により健康の基準は異なる(4) 一番大切なもの(3) 失って始めて大切さがわかる・生きがい・ふつうのこと・生きる力(各2)長生き・何をしても大前提・人類に平等に与えられた権利・立ちなおる力・人生を左右するもの・自分で管理する・	28	12.2
計		229	100.0

眠・「よく寝る」・「身体の調子がよい」・「疲労のないからだ」・「身体が正常」などであり、精神面とした内容は、「悩み不安がない」・「心が健やか」・「心配や悩みがあっても前向きな心」・「気分の良い状態」・「心穏やか」・「心が正常」など、そして社会面は、「周囲の人と助け合う」・「友と仲良く」などである。そして、P+M面とかP+M+S面などは、各々の側面が複合された内容のものである。生活面とした内容は、「生活に支障がない」・「気持ちよい生活」・「自分らしい生活」・「生活の基本」などであり、その他の内容は、「生きることが楽しい」・「人により健康の基準が異なる」・「一番大切なもの」・「人類に平等に与えられた権利」・「完璧なものはない」などである。

③ 側面別記述率

学生の記述内容がどの側面にふれているかを知るため、表4の中で明らかにP・M・Sの3側面にふれている174件の中で各側面の占める割合を側面記述率として算出した。その結果、身体的側面70.1% (122/174)、精神的側面63.2% (110/174)、社会的側面5.7% (10/174)であった。

④ 記述表現

次に表4に示したラベルごと(229件)の記述表現に注目した。ここでは、その表現が肯定的(+)であるか否定的(-)であるか、あるいは否定肯定を含むものまたは否定肯定と明瞭に分けられないものを混合(±)とした。すなわち、肯定的とは、「快食」・「よく寝る」・「心が健やか」・「気分がよい」・「心身ともに安定」・「気持ちよい生活」・「生きることが楽しい」などポジティブ志向のものとし、否定的とは、「身体に不自由がない」・「ケガがない」・「異常がない」・「悩みがない」・「病気がない」・「生活に支障がない」などネガティブ面がないと表現しているもの、そして、これら両者を含む例えば「病気があっても心が安定」とか、「人により基準が異なる」・「普通のこと」など否定肯定に分けられないものに分けた。その結果、肯定的(+)な表現は、54.2% (124/229)、混合(±)の表現21.8%、否定(-)の表現24.0% (55/229)であった。

5. 個別にみた健康観

① 個別にみた側面の記述数

個々の学生の記述全体に注目し、その側面数を見た。その結果は、表5のごとく、個人の記述の中にP+Mの2側面にふれている者が60人(72.3%)であり、次いでP+M+Sの3側面を含む者9人(10.8%)、1側面のP面のみが6人(7.2%)、M面

表5 健康観の記述内容の側面

	側面	人数	(%)
単 純	P : 身体的	6	(7.2)
	M : 精神的	3	(3.6)
	S : 社会的	0	
複 合	P+M	60	(72.3)
	P+M+S	9	(10.8)
そ の 他		5	(6.1)
計		83	(100.0)

表6 健康観の記述表現

表 現	人数	(%)
具 体 的	4	(4.8)
抽 象 的	69	(83.1)
具 + 抽	10	(12.1)
計	83	(100.0)

のみ3人(3.6%)であった。学士編入生・学部1年生別に検討すると、P面あるいはM面の1側面みの記述は、学士:7.7%、学部1年生:11.3%、P+Mの2側面は各々69.2%:72.8%、P+M+Sの3側面は、15.3%:10.0%と類似の結果であった。

② 記述表現による分析

記述全体の表現が、先に述べた肯定的のみか、否定的のみか、混合であるかを検討した。その結果、肯定のみの表現は25人(30.1%)、混合が残り58人(69.9%)で、否定のみの表現はいなかった。さらに記述の表現が具体的であるか抽象的であるかを検討した。その結果、69人(83.1%)は記述全体が抽象的表現であり、一方具体的表現の者は4人(4.8%)、残り10人(12.1%)は具体的な表現と抽象的表現の両方であった(表6)。ここでいう具体的表現とは、身体や心の現象が本人も他の人からも事実として明瞭にわかるものとした。例えば「食欲があり、身体のごくにも悪いところがない。ぐっすり眠れて目覚めがよい。心配があっても自分自身やまた他の人に相談してすぐ解消できる」「ごはんがおいしく食べられる時、朝起きて、今日一日頑張るぞと思える状態」などであり、一方抽象的表現の例として「心も体も満足した状態で生きていて楽しいと思える状態」「日常生活に支障がなく、普通に生活ができて満足できる状態」「心身ともにゆとりがあること、幸福に生活するための必要条件」などである。

6. 健康観とそれに関する要因

個々の学生の健康観に関する要因を知るため、こ

表7 健康観の三群と生活の満足度 n=83

健康観	A 群	B 群	C 群
満足	14 (51.9)	14 (35.9)	3 (17.7)
やや満足	12 (44.4)	22 (56.4)	9 (52.9)
やや不満	1 (3.7)	3 (7.7)	5 (29.4)
不満	0	0	0
計	27 (100.0)	39 (100.0)	17 (100.0)

健康観 A群：多側面で生活行動を含む P=0.029
 B群：多側面 or 生活行動を含む
 C群：単側面で抽象的

ここでは、健康観を幅広く多面的にとらえているか、また日常生活行動としてとらえているかの視点からとらえた。検討の手続きは、まず個々の健康観の記述全体内容の側面 (P・M・S) が多側面か単側面か、また日常生活行動を含んでいるか否か、記述表現が具体的か抽象的かを検討し、3群に分けた。すなわちA群は3側面にふれ、しかも日常生活行動が含まれ、具体的表現をもつ者、あるいはこれらを二つ以上満たすものとした。一方C群は、側面が1側面であり、日常生活行動が含まれず抽象的表現の者とした。そして、A群C群以外をB群とした。その結果、A群は、27人(32.5%) B群39人(47.0%) C群17人(20.5%)であった。

これら3群と自覚的健康状態、健康についての心配、健康への注意、月経録、生活の満足度、自己概念段階、住生活形態の要因を検討した。なお、自己概念段階は、自己概念総得点の平均値を算出し、平均値プラス1標準偏差以上を高得点群、平均値マイナス1標準偏差以下を低得点群、残りを中間群と設定した。その結果、生活の満足度と自己概念段階に有意差が認められた。すなわち、健康観の幅が広く日常生活に結びついている内容を持つA群は、B群・C群に比し、生活の満足度が高いものの占める割合が多かった (P=0.029) (表7)。また、自己概念高得点群の占める割合は、A群：16.7%・B群：18.9%・C群：0.0%でありA・B群は、C群に比較して多かった (P=0.030) (表8)。

IV. 考察

1. 看護学生の健康観

健康観は、個人の人生観や価値観によって異なるばかりでなく、文化的・歴史的背景によっても大いに異なることが指摘されている^{3)~7)}。

学生が記述した健康観は、一人一人異なり、83通りの考えがあることが示された。そして、記述内容を

表8 健康観の三群と自己概念段階 n=77

健康観	A 群	B 群	* C 群
高得点群	4 (16.7)	7 (18.9)	0 (0.0)
中間得点群	17 (70.8)	27 (73.0)	11 (68.7)
低得点群	3 (12.5)	3 (8.1)	5 (31.3)
計	24 (100.0)	37 (100.0)	16 (100.0)

健康観 A群：多側面で生活行動を含む *P=0.030
 B群：多側面 or 生活行動を含む
 C群：単側面で抽象的

健康に関する論議の原点となる「WHOの健康の定義」の3側面で分析すると身体面あるいは精神面の1面からのみ健康をとらえている者が約1割存在し、身体面と精神面の2側面の複合でとらえている者が7割と大多数をしめ、また1割が身体面と精神面そして社会面の3側面からとらえ、健康の見方の側面に幅がみられた。このことは、身体概念が強調された健康から心身概念へ発展し、さらに生活概念へと拡大してきた健康観の変遷過程そのものが現在の学生集団の中に存在していることを示している。また、対象が入学当初の看護学生であり、これらの結果は、同年齢の一般集団のなかで健康に関心のある者の健康に対する見方を反映しているとも解釈できる。なお、対象の中で他学部を卒業した学士編入生13人と、高卒後入学した学部1年生70人との両群間で健康観を比較したが、類似の結果であった。今後、これらの学生の背景の違いが、受ける看護教育により健康観にどのような影響をもたらすか興味ある追究課題である。

次いで健康観の記述が、観念的・非現実的⁸⁾であるか、実践的・現実的であるかを知るために記述内容を、抽象的表現であるか具体的表現であるかで検討をした。その結果、健康とは「ごはんがおいしく食べられる時、朝起きて、今日一日頑張るぞと思える状態」などと具体的な記述のみで表現した者は4人(4.8%)のみで、8割以上が、「心も体も満足した状態で生きていて楽しいと思える状態」「日常生活に支障がなく、普通に生活ができて満足できる状態」など抽象的な記述であり、残り1割強が両者の混合の記述であった。次に、記述表現が、肯定的であるか否定的であるかで検討をした。学生個人の記述全体では、否定と肯定を含めた表現をもつ混合が7割と大多数を占め、否定のみで記述した者はいなかった。同様に、記述内容を意味のとれる最少単位にした記述ラベルで検討すると、肯定的表現が過半数を占め、次いで24%が否定的表現で、残りが混合であった。

以上をまとめてみると、実践的・現実的な健康観は、現実の生活行動そのものや状態像が具体的に示され、したがって、そうありたいと願う具体的な目標になりやすく、言葉を換えれば望ましいと求められる方向を示す努力目標的な健康観になりやすい。一方、観念的・非現実的な表現は、「安定」・「正常」・「満足した」・「幸福と思える」など肯定的なものと、人間の社会や生活の中で、「異常がない」・「疾病がない」・「疾病が少ない」、さらに「心の悩みや不安がない」など否定的なもののない状態を健康ととらえていた。これらの健康観は、ある状態にとどまる静的な見方であり、あるべき願望や理想像とも考えられ、したがって、現実的具体的な目標になりにくい。発展して解釈すると、前者は、生命・生活・人生という生き方そのものを基本とする生活モデルの健康観⁹⁾に近く、後者は、健康は病気や障害のないことであり、病気や障害の対極が健康であるとする疾病モデルの健康観が根底にあると推察できる。

「自分で自分の健康を守る」看護学生を育てるには、人々特にまず看護学生集団の中にある多様な健康観に気づき、その中で「私の健康観」の位置とその方向を新たに見いだして知ることであろう。すなわち、「私の健康観」を基準にしながら「他人の健康観」と比較し、「私の健康観」を問うアプローチが有効であろう。さらに自らの生活行動や生活体験を通して健康観を求めていく姿勢を強調したい。すなわち、自分の生活行動の中に、そして時間軸をもつ生活の営みの中に、また成長発達という変化の中に、たえず心も身体もに望ましい状態と望ましくない状態の動的な相対関係で個人が存在し、そして個人の集合によって社会、集団が構成されているという個を重視した生活から全体の健康を考えていくことである。

2. 健康観と生活の満足

多様な健康観がどのような要因と関係しているかを知るために、今回は、健康観が多面的で幅が広く、しかも日常生活行動に結びついている割合を3段階に分け、それら3群と、現在の自覚的健康状態、健康行動、自己概念、生活の満足度などとの関係を検討した。その結果、心のありようを表す一つの指標である自己概念の総得点と自分の生活をどの程度満足しているかという生活の満足度が有意に関連することが示された。すなわち、健康観の幅が広く日常生活行動と結びついた健康観をもつ者の集団は、持たないものに比べて、現在の自己を肯定的にとらえ、また、現在の生活に満足しているものが多かった。このことは、自分の生き方を肯定的にとらえたり、満足できる生活を送って

るという主観的な生活に対する意識が、健康観に関連していることを示唆している。これを発展させれば、「よりよく」生きることが健康観の内容の重要な部分を占めている見方になり、同時にその個人がどのように感じ、あるいは受けとめているかという主観を大事にすることである。したがって、健康というものを、身体面・精神面・社会面という側面と、それらの各側面を客観的・主観的な両面から問うていくことであろう。

このように考えていくと、改めて1946年に提唱されたWHOの定義が世界の共通目標として世界の人々がその枠のなかで考え、求め、より良き生活の到来のために共に努力してきたことの基本に立ち戻る。そして、1978年「人々が健康を損なうことのないように、健康を維持できるように、少しでも健康を高めることができるように本人の努力と周囲の配慮(環境)を重視した」プライマリ・ヘルスケアに関するアルマ・アタ宣言³⁾、さらに1986年のオタワ憲章に示された「人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるように環境を改善し、環境に対処する公的、組織的な活動を総合したプロセス。健康は生きる目的ではなく毎日の資源である」というヘルスプロモーションの提唱³⁾へと動いている時代のなかで、主観的な側面を重視した個人の健康の質を問い続けていく意味の重要性を認識させられる。

今後、「自分の健康を自分で守る」こと、そして「人の健康を守り高めていく」ことを目指す看護教育(研究)においてこの主観を重視した健康観の問題意識をどのようなアプローチで取り組み実証化させて行くかの方法の検討という大きな課題が残されている。

V. おわりに

本調査は、看護学を専攻して入学した学生の健康観とそれに関連する要因を明らかにすることを目的とした。1997年4月に、入学した学生を対象に「健康とは何ですか」の自由記述を中心に現在の健康行動・自覚的健康状態・生活の満足度・自己概念・属性などを求めた質問紙法を実施した。健康観の記述は、KJ法に準じてラベル化し、WHOの健康の定義の3側面と記述表現から内容を分析した。その結果、健康を身体面と精神面の複合で約7割がとらえていたが、身体面のみ或いは精神面のみ、そして3側面から健康の見方に幅があった。また、記述の表現を観念的で非現実的と実践的・現実的に分けて検討をすると前者は疾病モデルに基づく健康観が多く、後者は生活モデルに近い健康観であった。また健康観の幅が広く日常生活と結びついた健康観を持つ群は、持たない群と比し、自己概念総合得点が高く、生活に満足し

ている者の割合が多く占め、「よりよく」生きることに関する主観的なことが健康の内容の重要な部分を占めていることが示唆された。

今後、健康に関して、主観を重視していきたいという問題意識を、看護教育においてどのように取り組んで行くかの検討が大きな課題として残された。

文 献

- 1) 上田礼子 : Self-Concept and Related Variables in Retain Identifying Adolescents at Risk 民族衛生 59(5) 215~234 1993
- 2) J, Neemann, S, Harter : Self-Perception Profile for College Students. University of Denver 1986
- 3) ヘルスプロモーション WHO : オタワ憲章 (島内憲夫訳) 垣内出版 1990
- 4) 園田恭一 川田智恵子編 : 健康観の転換 東京大学出版会 1995
- 5) 菱沼典子 : 看護学における「健康」の概念 聖路加看護大学紀要 19 1~8 1993
- 6) 特集QOL : 保健の科学 37(9) 1995
- 7) 吉田 亨 : 健康教育の潮流 保健婦雑誌 51(12) 931~936 1995
- 8) 内山 源 : 現代学生と健康観 学校保健研究 19(5) 213~217 1977
- 9) 福田邦三 : 保健学における健康相談の立場 学校保健研究 17(8) 552~558 1975

英文抄録

Health-Concept and Related Variables in the First-year Nursing Students

Michiko Ozawa, Chie Kaharu, Yuki Yokoyama, Yumi Sakyo

Abstract

Health is considered to be one of the basic concepts in Nursing.

The purposes of this study are to know the Health-Concepts of the first-year nursing students and to understand related variables for health concepts.

In April 1997, we conducted a questionnaire on 83 first-year nursing students. Health-concept was questioned by open type. We investigated them by health definition of WHO: physical, mental and social point of view, and descriptive expression.

The findings were as follows :

- 1) Some 70% students grasp the health-concept in the combined view points-physical and mental.
- 2) Some students apply disease model, considering health is an opposite of illness and disability ; other students apply life model.
- 3) Many students whose health-concepts are related to daily life are satisfied with thier lives and have a positive self-perception.

It is important to develop student's health-concept. For this purpose, each student should recognize her own position and direction to take.

Key words

Health-Concept, Nursing Students, Freshman
